
レインマシン

ふらじゃいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レインマシン

【Nコード】
N7957L

【作者名】
ふらじゃいる

【あらすじ】
衛星軌道から地球の気象を操作し、死の雨を降らせるレインマシン。荒廃していく世界は、か弱い少年に優しくはなかった。いったいどうしたらこの雨がやむのか。荒野に逃げ出した少年はその答えを知る。

レインコートを着ずに外へ出るのは、タバコを吸うよりも体に悪い。

そんなことは誰だって知ってるし、能なしの僕だって承知していた。——それでも僕は、こうして歩きたかったんだ。

峠へつながる道路を歩きながら、僕はどす黒い空をにらんだ。

レインマシンの作る雲は、黒い雨を降らせる。この黒い雨にはごくごく微量の放射性物質が含まれていて、僕が知っているかぎり、ひどく体に悪いものらしい。

レインマシンが出現した三十年前ぐらいは、この辺りは美しい森林地帯だったという。

でも、今ではくたびれきった枯れ木が点々と見えるだけの禿山が暗くそびえている。

そういう、木々が少なくなった山は土砂崩れが多くなるから、こちらの道路の周囲の崖は何かの薬で固められていて、さらに広い範囲で落石を防ぐネットが敷かれている。

道路に降りそそいだ黒い雨水は川にはけられるので、墨汁が流れているような黒い川ができる。

そして、そうやってできた黒い川は今現在、海を真っ黒にしようと頑張っている。

地球を取り囲むように無数のレインマシンが空のずっと高いところに浮かんでいる今となっては地球を外から見る事ができなくなってしまったけれど、きっと地球はかぎりなく黒に近い濃紺になっているはずだ。

僕らはレインマシンに重大な食料危機を引き起こされ、年々その数を減らしている。

食料が減れば当然食料品の値段が上がる。経済っていうのは複雑

で、他の物の値段も上がる。で、みんな貧乏になる。

仕事がない人も増えてきて、僕のお父さんも何ヶ月か前からずっと家にいる。

お母さんはパートに出ているが、家計は苦しいみたいで、家にいるときはいつも機嫌が悪い。

「昼間つからごろごろ酒なんか飲んでないで、日雇いでもなんでもいいから少しは稼いでくれば」

とお母さんが言い、お父さんは黙って家の中の何かを壊しに行くか、僕の部屋に僕を殴りにくる。

僕がバンソウコウを取りにリビングへ行くと、

「生きてたの」

とお母さんが言う。

今日は、

「あんたがいなくなれば靴下が買えるのに」
だつてさ。

それに最近、みんなお腹がすいてて、警察もそうだからなのか、犯罪が多い。

学校に行くのにも勇気がいる。みんな護身のためにスタンガンや催涙スプレーを持ち歩き、ちょっと悪い奴は、ナイフを持っている。学校の中にはいくつかのグループがあり、毎月リーダーと組織にお金を払って身の安全を保つ。

僕はおこづかいがもらえなくなって、どのグループにも入れなくなった。で、そういう奴はイジメにあうようになってる。

グループ登校ができない僕は毎朝、学校の中でも特に素行が悪いグループの奴らを避けるようにして行かなければならなかった。

捕まったら最後、殴られたり蹴られたりするならまだいいが、あれを盗んでこいとか、女の子を連れてこいとか、言われるからだ。

今日はクラスメイトの奴らに脅され、六十歳になるシワだらけの女の校長先生にキスした。

それで、僕は教室で筋骨隆々の体育教師に折檻されることになっ

た。

大勢の前で肩に抱えられ、パンツを引っぺがされて尻を丸出しにされ、何度も何度もぶったたかれた。

クラスみんなは笑い声を押し殺していたが、耐えられなくなつてふきだしてしまった奴を皮切りに大笑いを始め、平手が打ちつけられるたびに爆笑が起こった。

終わった後、先生も笑っていた。

みんなの心にも、どす黒い雨が降っている。

もう、レインコートはいらない。僕はそう考えていた。

レインマシンが僕らを殺そうとするのなら、そうされればいい。

地上の大气が空に昇って、雲を作り、雨を降らせる。この黒い雲も、黒い雨も、レインマシンじゃなくて、僕らが作ったものなんだ。

——そう、グローバー博士が言っていたんだ。

ハヤト・F・グローバー博士は、前に僕の通っている小学校にレインマシンについての講演をしにきた研究者だ。

僕の住んでいる町に、グローバー博士の研究室が入っている大学がある。

それで、僕らの小学校には月に一回、大学から先生がやってきて、僕らに課外授業をしてくれる。で、その一人がグローバー博士だった。

アメリカ人で、歳は二十五歳。お母さんが日本人で、大学に入るまでは僕らと同じように日本で育つたらしい。

背が高くて体格が良くて、彫りの深い厳つい顔をしていたが、笑うと猫が眠っているときに見せるような可愛げのある細目になる、優しいそうな人だった。

半袖短パン、メッシュキャップというラフな服装で、『博士』なんて呼ばれているのが変な感じだったけど。

学校の体育館で全校生徒を前にして、グローバー博士はバスケットボールを片手に、それを地球に見立ててレインマシンが与えた人

類への影響をわかりやすく解説した。

ときどきドリブルしたりシュートしたり、いつでも自由に質問させたり、堅苦しくなくて飽きがこない講演だった。

「実はね、レインマシンはちよつといい面もあるんだ。彼らが現れる前は、大小さまざまな戦争が世界中で起こっていた。でも彼らが現れて、人類は戦争ができなくなった。異常気象で戦争どころじゃないっていうのも理由の一つだけど、それだけじゃなく、レインマシンはGPS衛星を始めとした情報戦争に有用な電子機器を強力な妨害電波で無力化させているんだ。GPSっていうのはね、今、どこに何があるか教えてくれる機械。たとえば、どこかに行きたいとき、それがどこにあるか教えてくれる。昔のカー・ナビゲーション・システム——カーナビは、この機械をつかってたんだ。戦争のときは、それで敵がどこにいるかわかるから、遠いところからそこに向けてミサイルを撃つたりできる。レインマシンはそういうことをできなくさせているんだ。それは地上からの人間の攻撃を防ぐためだ。って多くの人が言ってるんだけど、もしかして、レインマシンは平和主義者なのかもしれないね」

この言葉にみんながざわめいた。

みんなが悪魔みたいに思っているレインマシンを、グローバー博士はまるでいい奴みたいに言うからだ。

「そうだね、そしたらなんでレインマシンが黒い雨を降らせているのかって、みんな不思議に思うよね。僕はね、もしかして、僕らの方に問題があるんじゃないかって考えてる。そう、君たちも理科の授業やなんかで習って知っているように、地上の気圧が上昇気流によって空に運ばれて雲を作り、雨を降らせる。わかるかな？ うんだとすると、あの黒い雲も、黒い雨も、レインマシンじゃなくて、僕らが作っているものなのかもしれない」

みんなが頭の上にはてなマークを浮かばせているのを見て、グローバー博士がおかしそうに目を細めてつぶけた。

「僕が言いたかったのはね、物事には理由があるってことさ。つま

り、レインマシンは僕らが必要な条件を満たすことで、雨を止めるかもしれないって、僕は考えているんだ。そう、例えば……、君、算数は得意かい？ あはは、そうでもない？ でも、もしも君が算数のテストで満点を取ったら、雨が止まるかもしれないな」

みんなの笑い声が体育館に響いた。

「今もいろんな人たちが研究しているのにもかかわらず、レインマシンがどうして雨を降らせているのかはわかっていない。それがわかれば、雨を止める方法も見つかるだろう。その逆でもいいが……」
グローバー博士はバンバンと地面に打ちつけていたバスケットボールを両手に抱えて、少しの間沈黙した。

中空を見上げて、何か考えているみたいだった。体育館が急に静かになって、雨音がひときわ響いた。

「君たちも考えてみるといい。この次、また僕が来たときまでの宿題だ」

グローバー博士がスリーポイントシュートを決めて、講演が終わった。

僕がこうして郊外に歩いてきたのも、グローバー博士に会うためだった。大学に行って聞いてみたら、山へ出かけていったと言われたからだ。

会って何を話そうかなんて考えていなかった。何となく、僕はグローバー博士に会いたかった。

でも今は、もっとわからなくなっていた。

大学の人に大体の場所を聞いただけだった僕は、あてもなく町から離れ、ただただ逃げるように足を動かしている。雨に打たれたかっただけかもしれない。

僕は道路の縁石を飛び越えて、大きな黒い水溜りに両足を突っ込ませた。

飛び跳ねる雨水と、いつそう強くなる黒い雨が、嫌な気持ちをまぎらせた。

ふと立ち止まって、手のひらに黒い雨を溜めてみた。黒くなかった。

でもやっぱり、雨が目に入ると、痺れるような痛さがあった。溜めた雨水を飲んでみようかと考えた。

しばらく考えていたが、僕は少し離れたところの雲に奇妙な異変が起こっているのを見つけ、驚きと共に雨水を落つこととした。

どす黒い雲に囲まれて、一点だけ隙間があき、光がこぼれている。僕はこんなに鮮やかな光を見たのは生まれて初めてだった。

栽培室での授業によって、人の手で作られた太陽の光は何度も体験している。

また、映写室でも、宝石の岩礁の上で歌う人魚とか、原初の地球を描いたものなど、世界中のアーティストたちが設計したファンタスティックなホログラムを見たことがある。

でも、そのどれよりも惹きつけられる美しさがそこにあった。僕は、僕がもう少し小さい頃、初めて好きになった女の子の笑顔を見たときのことを思い出した。

でも、ただ綺麗ただけでなく、普段ははっきりと見えない、遙かな天空のどす黒い雲の動きを照らしだしている光の壮大さに恐怖を感じ、背筋が痺れた。

僕は光に向かって走った。

急な崖を避けながら、ときどき転びそうになって地面に手をつきつつ、息が切れてきて苦しかったが、僕は自分でも信じられないほど懸命に駆けた。

お父さんや学校の悪い奴らに追いかけられているときだって、こんなに速く走れたことはない。ただ、あの黒い雲の向こうを見てみたかった。

二十分ほど走り続けて、だんだんと近づくにつれ、雲の隙間に輝く薄い水色が見えてきた。

雨が次第に小降りになってきている。光の当たっている地面が前方に見えてきた。

僕は光に照らされている大きな岩の上へ登って、雲の隙間を見上げた。

太陽の光は暖かく、空は青かった。雨は降っていない。雨が降っていないと、こんなに静かだったのか。こんなに明るくて、暖かいのか。

光り輝く空の青色は、僕がこれまでに見た宝石や、植物や、絵の具や動物のどの青色よりも魅力的な青だった。

僕はまるで地獄から天国を覗き見しているような気がして、目をこすったり頬をつねったりした。

僕は首が疲れたのでぐるぐると回した。すると、光に照らされた大地のちょうど中心に、大きなタイヤの車のボンネットに腰かけて空を見上げているグローバー博士が目に入ってきた。

前みたいに、猫が眠っているときみたいな細い目をしている。

僕が岩を降りて近づいていくと、グローバー博士は気がつき、ちよつと驚いてから、

「やあ、雨男。ふふっ」

と言った。

「そういえば、電話で聞いたんだけど、大学に来た子供って、君かい？」

僕はうなずいた。

「危ないじゃないか。こんなところに一人で。レインコートも着ずに……。少し大きいかもしれないけど、僕のやつを貸してあげるよ」「いりません」

「え？」

「レインコートはいらないです」

グローバー博士が僕の話聞いて、大笑いした。

クラスメイトや先生みたいな見下すような笑いじゃなくて、嫌らしさがなく、本当に面白いという感じだった。細目がいつそう細くなって、目尻から涙が出てきた。

人の不幸話を聞いて、ここまで包み隠さず大笑いする人も珍しい。いつしよに悲しい顔をされるよりも、僕はなんだか気分が良いように感じた。

「しかし、レインコートも着ずによくここまで歩いてきたね。子供っていうのは、こういうところが素晴らしい」

グローバー博士はまた、腹を抱えて笑い始めた。馬鹿にされてるみたいなのに、つられて笑顔になってしまいそうで、僕は下唇を噛んで眉間にしわをよせた。

「こんなところでなにをしてるんですか？」

「『晴れ』を作ってる」

空を指さして、グローバー博士が言った。

「どうやって？」

グローバー博士はなにか言いかけたが、やめて、逆に僕にきいてきた。

「僕が出した宿題の答えは考えてきたかな？ ほら、どうしてレインマシンが雨を降らせているのかってやつさ」

僕が首を振る。

「じゃあ、晴れの作り方を教えてあげるから、君は答えを今考えるんだ。いいね？」

僕は力強くうなずいた。答えなんてたぶんわからないだろうが、晴れの作り方を一刻も早く知りたかったからだ。

「どんな機械で晴れを作ってるんですか？」

僕は車の中を覗いたりしながらたずねた。

「機械なんて必要ないよ。ただ、空に向かって笑うのさ」
「え？」

「レインマシンは地上にいる人間の表情を観測しているらしい。まだ僕にもよくわかっていないんだけど、レインマシンは空に笑顔を向ける人間の周りを晴れさせる」

「そ、そんな簡単なことで？」

信じられず、僕は目をむいて疑った。

けれどグローバー博士がこつくりとうなずくので、僕は気が抜けたような顔になって、空を見上げた。

「あはは。なんてくだらないと思うだろう？ 僕も同じ気持ちだよ。比較行動学の視点から考えると、クラスタリングされているレインマシンの……ごめん、つまらない話だ。やめよう。結局のところ、僕にはどうしてこんなことが起こるのかわからないんだよね」

グローバー博士は眉間にシワをよせて難しい顔をしたが、すぐにまた、見ていて安らぐような細目の笑顔になった。

「レインマシンの奴は黒い雨だけじゃ飽きたらず、不思議な謎かけまで降らせてくれたよ……。でもね、僕はこのことを知ったとき、レインマシンの声が聞こえた気がしたんだ」

僕はその言葉に興味がわいて、聞く耳を立てた。

グローバー博士は僕が集中していることを確認するには十分な間を置いてから、話を続けた。

「もしかしたら、レインマシンは全ての人間が笑わないかぎり完全に雨を止めないつもりかもしれない。そして、このまま雨が止まらなければ人類は滅亡する。そう思ったとき、聞こえたんだ。『みんなが幸せにならないのなら、人間なんか滅んでしまえ』っていう、レインマシンの声がね」

一言一言を丁寧に語りながら、グローバー博士の表情が少しずつ険しくなっていた。

「でもそれは無理な話だ。みんなが幸せになるなんてね。今幸せな奴だって、いつまでも笑っていられるとはかぎらない。どうしたっていつかは不幸が襲う——」

グローバー博士の表情が悲しく固まった。空はそれに応えるかのように光り輝く水色をグロテスクな雲で狭めていき、再び黒い雨を落としはじめた。

「——また、晴れがやんだ」

つぶやくようにグローバー博士が言って、レインコートのフードを被った。

「さあ、今度は君の番だ。答えを聞かせて」

「……ごめんなさい。わかりません」

首を振りながら僕はボンネットを降り、ぼんやりと歩きだした。頭の中で、グローバー博士の言葉が何度も繰り返された。

みんなが幸せに……？

瞬間的に、お父さんが僕の部屋の壁にウィスキーのビンを投げつける場面を思い出した。

はじけた破片が目にも止まらぬ速さで僕の首筋に細い切れ目をつけた。僕は腰が抜けて、座り込んだ。お父さんがサッカーボールみたいに僕を壁に向かってシュートした。

みんなが幸せに……。そんなの無理だ。僕らはやっぱり、このまま死んじゃうんだろう。

でも、レインマシンは本当にそういうことを言いたいんだろうか？

「もう帰るの？ 車で送って行くよ。それにやっぱり、レインコート貸してあげるよ」

僕は、遠くに小さく建物らしきものがおぼろげに見える、町を見つめた。

今日も大勢の人々が、レインコートの中に仏頂面を作って外を歩いているんだろう。

あそこでは、誰もが生きること必死で、誰にも出し抜かれないように気を張りつめている。弱みを見せたら最後、徹底的に痛めつけられるからだ。

僕はもう、あんな町には帰りたくはなかった。

レインマシンはこんな状態にさせておいて、みんなに幸せになれって言うのか？

違う。レインマシンは最初からみんなを殺すつもりなんだ。ゆっくりと、長く長く苦しませて、地獄みたいな世界にして生きる希望をなくさせたいんだ。

そう、この僕みたいに。

僕は無意識に絶叫していた。悔しさと怒りが混じったような、腹

にたまつたへどろを吐き出すみたいに。

息が切れて声が續かなくなり、腹の中には悲しい気持ちだけが取り残された。

みんな、どうせ死ぬなら、僕みたいにレインコートを着なければいい。そして、笑われればいい。笑われれば……。

僕は雨の中で、涙を流していた。その白いしずくは、僕の悲しみを不思議なくらい良く吸い込んで流れていった。

聞いたことがある。涙にはストレス物質を体の外へ排出させる作用があるんだ。

僕はなんだか、してやられたみたいに気分が良くなった。そしてなぜか、さつきグローバー博士に笑われたことが頭に浮かんだ。

そのとき、頭の後ろがざわついた。僕ははっとして、空を見上げた。

そこにはやはり、分厚くどす黒い雲があるだけだ。だが、もしかしたら、と僕は息をのんだ。

僕には今、確かに聞こえた気がした。その雲の遙かな向こうに浮いている、レインマシンの声が。

「……グローバー博士」

「ん？」

「さつき、博士に笑われたとき、最初は嫌だったけど、なんだかだんだん僕まで笑いたくなってきたんだ……」

僕は足りない脳みそを懸命に回転させて、おぼろげなレインマシンの声をつかもうとした。

心臓がゆっくりと、強く鳴った。これを言葉にできなければ、絶対に後悔する。

「うまく……言えないけど、グローバー博士があんまり楽しそうに笑うから、僕もいつしよに笑いたくなつたんだ」

なんとなく形になってきたような気がする。もう一押しだ。

さつき僕に、レインマシンはなんて言つたんだ？僕は両手のこ

ぶしを力強くにぎり、足を踏みしめた。

「楽しいことがあったわけじゃないし、嫌なことは嫌なままだよ」

僕は汚れた空を見上げた。それに重なるようにして、両親や、学校の奴らや、嫌な先生たちが浮かんでくる。

「でも、別に、そんなことは関係ないんだ」

僕は彼らに笑いかけられたことはないが、僕が彼らに笑いかけたことはあっただろうか。

このとき僕は、レインマシンの言葉がようやくわかった。

「幸せだから笑うんじゃない。笑うから、幸せになるんだ」

僕は生まれて初めて、彼らに笑いかけた。

それに応えるかのように、瞬間、大空にはびこっていた暗雲が、もの凄い勢いで渦を巻きながら球状に裂けた。

さつきとは比較にならないほどの大きさの青空が広がり、そこからまばゆいばかりの暖かい光が降りそそいだ。

周囲の分厚い雲は聖域をよけて、弱弱しくただよっている。

野球を何十試合もできるほどの地面が照らされ、僕はまったくの禿山だと思っていた周囲の山々に、まだわずかに緑が残っているのに気がついた。

雨粒のない風の吹き抜ける匂いがすがしかった。

こんなに気持ちがいいのは、僕の短い人生の中じゃ、はじめてだ。僕は大きく伸びをして、何度もジャンプした。すげー、すげーと、何回も繰り返しながら大笑いした。

どんなに目を凝らして空を探してみても、レインマシンの姿はどこにも見当たらなかった。

学校で習ったとおり、空のずっと上に浮いているんだ。でも、なんだかいっしょに笑ってくれているようで、嬉しかった。

あの黒い雨雲は、確かに僕が作ったものだったようだ。そして、この晴れた空も。

「いい答えだ。……もう、レインコートは必要ないね」

日差しを手で遮りながら、グローバー博士が僕のところまで近寄

つてきて、肩に手をおいた。

遠くに見える町の上の空には相変わらず、どす黒い雲が広がっている。

あの町に戻るのは怖い。でも、空が晴ればこんなに明るくて、暖かい。

「町には多くの人間がいるから、ここみたいに簡単にはいかないよ」
グローバー博士が、僕の心を見透かしたように言った。青空を見上げながら、猫の笑顔で。

僕は、お父さんが僕の部屋を出ていくときの、悲しそうな目を思い出した。

学校みんなの、いつもなにかにびびっているようなにこった目も。

あそこの雲は、ここより厚そうだ。でも、空が晴れることを知った僕は、小さな決意をして、レインマシンを見上げた。

レインマシン、僕を殺せるものならやってみろ。僕はもう、お前を敵とは思わない。

——今度はあの町で会おう！

（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
よかつたら感想をいただけるとすごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7957/>

レインマシン

2010年10月8日14時48分発行